

「志」のバトンを受け継いで

石垣市立石垣中学校 二年

宮良 亘

九月二十二日、その日は僕の曾祖父の命日でした。親戚が集い、曾祖父の思い出を語る中、僕の祖父が「うちなー賛歌 沖繩の心・平和のメッセージ」という一冊の本を手に現れました。「なんだか難しそうな本だな」と祖父の手にあった本を覗き込んでみると、祖父があるページを開き、そこに書かれていた「宮良英加」という人の話をしてくれました。沖繩戦で若くして戦死し、今、沖繩師範健児之塔に祀られているその男性は、実は僕の曾祖父の弟だということです。一冊の本に載るくらい有名な人が僕の親戚にあたるなんて、本当に驚きました。同時にこの人がどんな人物で、どんなことをしたのかとても気になり、祖父に英加じいちゃんの話聞きました。

英加じいちゃんは「教師になりたい」という夢を持ち、石垣から沖繩本島に渡り、師範学校へ進学しました。しかし、戦況が厳しくなり、鉄血勤皇師範隊として召集され、志半ばで戦争によって命を落としたということでした。右手を負傷し切断することになった英加じいちゃんは「チヨークが持てなくなる」と何度も切断することを止めるよう懇願したそうです。僕はこの話を聞いた時、その場面を想像して、全身の鳥肌が立つ思いでした。しかし、無残にも右腕は失われ、それだけでなく命までも亡くしてしまったのです。一人石垣の家族の元を離れ、夢と希望を持って本島に渡った英加じいちゃんの悔しさはどれほどだったのでしょうか。夢は自分自身の努力次第で実現すると思っている僕たちの時代とは大きく異なるこの話を聞き、僕の心は悲しい気持ちになりました。きつと英加じいちゃんだけでなく、その当時のたくさんの若者が英加じいちゃんと同じように志半ばで命を落としていったのでしょうか。

英加じいちゃんのエピソードで、僕が忘れられない話がある一つあります。それは、捕虜として捕えられ、木に縛られていた米兵に英加じいちゃんがそつと食事を与えたという話です。この話を聞いた時、僕は「英加じいちゃんは何で心やさしい人なんだろう」と感心しました。しかし、戦時中においては、その行動は日本国民として最も恥ずかしい行動であり、敵に恩恵を与えるなど最低最悪の行為だったのです。そのため、英加じいちゃんは日本軍から、顔の形が変形するくらいリンチを受けたというのです。人が人を思いやる、人間としてあたりまえの行動が否定されてしまう戦争は本当に恐ろしいものだと思えました。

これまで六十数年前の出来事だと、遠い昔の、自分とは関係のないことだと正直思っていた戦争。しかし、祖父から話を聞く中で、僕は英加じいちゃんの命を奪った戦争を本気で憎く感じました。戦争によって命のバトンが断たれるという話を聞いたことがあります。僕はこの話を聞いて、「命のバトン」が受け継ぐのは命だけでなく、その人の意思も含まれるのではないかと感

じました。もし、この本がなければ英加じいちゃんのことを知ること、そして英加じいちゃん
の素晴らしさを知ることがなかったでしょう。

今回の祖父の話をつつかけに、「僕の体には、英加じいちゃんのような相手のことを思いやる
優しさや、自分の夢をかなえるために行動する強さをもった血が流れているんだ。」と、大きな
パワーがみなぎり、何にでも頑張れる意欲が沸いてきました。

僕が今生きているこの世の中は、じいちゃんの生きた「戦争」の頃とは明らかに異なり平和に
なっています。僕たちの頭や心の中にも、「戦争はいけないもの、平和は大切なもの」だという
意識が確実に根付いています。それは、じいちゃんのように戦争を体験し、「平和」の大切さ、「命」
の尊さを知っているお年寄りが、自分自身の体験を伝えてきてくれたからこそだと思います。し
かし、戦後六十年が経った今、戦争の体験者の方も減り、沖縄戦が風化してしまうかもしれない
という話を聞きました。そんな時だからこそ、僕たちができることは、僕たちが伝え聞いた平和
の尊さや命の大事さをしっかりと感じ、僕たちの後の世代にしっかりと伝え、共に行動してい
なければならぬと感じました。努力次第で夢をかなえることができる、優しい気持ちで人に接
することができる、そんな平和な世の中に生まれたからこそ、僕は英加じいちゃんの意志を受け
継いでいきたい。

「情熱の塊のような人だった」じいちゃんをよく知る人が語った言葉。僕もじいちゃんに負け
ない熱い心を、そして、周りの人を包みこむ優しさを持った人になりたい……。

九月二十二日、今年の曾祖父の命日は、僕にとって平和を願う気持が一層強くなった日であり、
新たな目標ができた忘れられない一日となりました。